

第4回 生活支援型コミュニケーションWG 議事録

日時 2006年10月23日(月)17:00~19:10

場所 NICT知識創成コミュニケーション研究センター TV会議室

出席者6名(順不同・敬称略)

日本電気(株)	: 山田、山下
船井電機(株)	: 松井
京都大学	: 美濃
大阪工業大学	: 佐野
NICT	: 山崎

(1) 山田主査ご挨拶

以下に山田主査のご挨拶の概要を記す。

「このWGが発足して2年になる。ユビキタスホームをいかに活用しながら生活支援をするかというところを具体的に議論していきたい。合宿やミーティング等を繰り返しながら、生活の中で身の周りのセンサーをもっとつなぎ、その中で取れる情報を基に環境とユーザとがどういう対話をすればよいか、というところまで作り上げて考えていこうと思っている。その資金作りとしてSCOPEなど外部の助成へ応募していきたい。」

(2) NICTの研究体制の説明(資料1)

NICT山崎より、資料1に沿って平成18年度からのNICT知識創成コミュニケーション研究センターの体制の説明があった。NICT側で行われる研究は「自ら研究」と位置付けられ、当WGと対応つけられているのが、ユニバーサルシティグループの山崎の属する「ユーザ適応インタラクションプロジェクト」となっている旨、ならびに、SCOPEなどの外部ファンドを取りに行くことが推奨されていることの説明があった。

【質疑・意見等】

- ・(質問)オープンラボと自ら研究とでは線を引くようにと聞いているが具体的には?
→NICTの当プロジェクトでやっていく「自ら研究」は人とシステムがフェース・トゥ・フェースに向き合った状態での対話に関する研究で、それと関連したテーマ設定が望ましいと思う。
- ・(質問)対話を非言語情報を使ってリッチにするのが自ら研究のようだが、対話のネタを生み出すのはオープンラボの方で、というきり分けでいいのか。
→人の状況をセンシングしてデータベースに蓄えていく部分も自ら研究でやる。
- ・(質問)対話と言うのは機械と人間に限定したものか。
→そのようなシステムを対象としている。
- ・(質問)自ら研究とオープンラボの研究は全く重なってはいけないのか。人を分けるか、仕事を分けるかという話ではどうか。
→人を分ける方。研究内容が全く別個のことになるのは慎まなくてはならない。「自ら研究」があって、その技術の一部分をオープンラボで利用できるようなこともある。
- ・去年のデータをいかに活用するかが問題。去年の研究との絡みでいうと、去年まではデータを取る環境はできたが、その先ができなかった。データをマイニングすることにトライしたい。
- ・自ら研究との切り分けが必要となれば、応用を分けるか、扱うデータを変えるか、しかないと思う。

(3) けいはんな情報通信オープンラボ研究推進協議会の体制の説明(参考資料1)

NICT山崎より、参考資料1に沿って現在のけいはんな情報通信オープンラボ研究推進協議会の体制の説明が行われた。平成18年度からの大きな変更点。

- ・ ヒューマンコミュニケーション分科会(HC分科会)が解消され、新たにユニバーサルコミュニケーション分科会(UC分科会)が設置された。

- ・ UC分科会の直下に、言語コミュニケーションWG(HC分科会時代からの発展的継続)、知識処理システム準備WGが設置された。
- ・ ネットワークロボット分科会がユニバーサル&ロボットシティ専門委員会に変更され、UC分科会傘下になった。
- ・ ユニバーサル&ロボットシティ専門委員会の中にホームネットワークWGが新設された。
- ・ 高機能ネットワーク分科会が新世代ネットワーク分科会へと名称・内容が部分的に変更になった。

【質疑・意見等】

- ・ (質問)分科会と専門委員会の違いは？
→協議会の事務局レベルで決められたもので経緯、位置づけの違いなど正式に聞かされていない。
- ・ 専門委員会の位置づけが中途半端である。
- ・ WGをUC分科会の下に同列に並べるのが普通ではないか。
- ・ 報告先が違っていい認識でいる。

(4) 今後の研究の進め方

山田主査より資料2のオープンラボシンポのパネルの内容説明があり、これの検討に先立ち、WGでの研究を今後どのように進めていくかの議論を行うことになった。以下に主だった意見を列挙する。

- ・ どのようなセンサーを用いるかの検討が必要。健康に関するセンサーに関して、オムロンヘルスケアに山田主査が訪問する予定がある。
- ・ ストレスを測定するものが市販されている。加速度センサーや心拍計、筋電センサーもある。
- ・ 診断など医療行為の方へいかず、予防医学や健康増進にしないといけない。
- ・ これまでユビキタスホームでとったデータを構造化して、タグを付ける。共通の構造化に関する議論が必要。
- ・ 観測データをセグメンテーションするためのツールを持ち寄る。
- ・ 「姿勢をとれるかということに着目して、画像からセンシング、タグ付けをどうするかを検討する。
- ・ 頸椎に視点をおくのがいいのではないか。ある年代が来た人には切実な問題である。
- ・ 意味のタグ付けをするためには、その場で被験者に記録をつけてもらう必要がある。
- ・ 体の左右のバランスを観察することも健康に関係する。
- ・ 画像からどこまでセンシングできるかが問題。姿勢をとるのは難しい。
- ・ イベントのタグ付けシステムを目指しましょう。目的は健康支援。

(5) SCOPEへの応募について

(4)の議論に基づいて、山崎がたたき台を作成することになった。

→その後、準備不足・時間不足のため研究テーマの具体化が不足に、申請を見送ることになった。

研究テーマ、特に応用と深める技術内容について議論は継続していく。

(6) オープンラボシンポパネルについて(資料2)

パネルは山田主査が見直すことになった。

→その後、見直し案を事務局へ提出。

以上